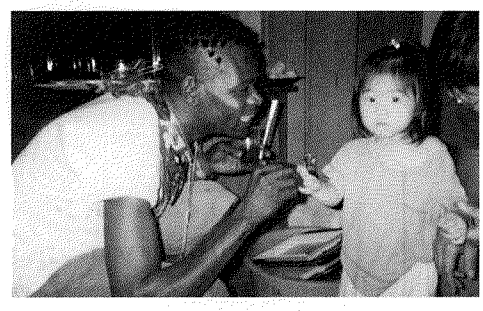
学び36 違いをゆたかさに

～入門編～

グループ討議　30分

【学習のねらい】

世界の国々においては多民族、多文化社会が多く、均質性が強いと言われる日本は少数派に属する。自分たちの文化を大切にしながら、異文化の人々と共に暮らすための行動を考えるきっかけとする。



「こんにちわ」とコミュニケーション

【準備するもの】

・外国から来て日本へ定住している方の手記等
・ワークシート（講演内容に応じて作成する）
　または記入用紙

【進め方】

（1）外国から来て日本で暮らしている方を招き、日本に定住するまでの経緯や現在の気持ちなどを語ってもらう。
（2）参加者には事前に配布した資料を参考に、講師が「なぜ日本での定住を決意したか」や「どのようにしてコミュニケーションができるようになったか」等をワークシートに記入してもらう。
（3）グループ分けをし、自己紹介をしてから、感想や問題点について話し合い、グループ毎に問題提起をする。
（4）話題をいくつかにしぼって、全員で討論をする。

【留意点】

（1）人種、民族、文化、習慣、宗教等の違いを、私たちの人生や世界を豊かにしてくれるものとしてとらえる。
（2）異文化理解には、その国や地方に関する知識や情報も必要とされる。誤解や偏見をなくすために必要な点を講演者と打ち合わせしておく。
（3）討論では、ファシリテーターが発見や理解につながるような点を取り上げながら、心情面での感想や意見も出るよう配慮する。
（4）ワークシートを作成する場合は、外国から来た一人一人の方が置かれているさまざまな背景や実状について、話し合いができるように留意する。

外国から来て日本へ定住している方の手記

『日本の娘』から『中国の娘さん』になった『日本人』の私

中国引揚者生活指導員　窪田 桂子

私の父は中国人で、母は中国残留日本人です。11歳のとき「文化大革命」を迎え、知識人の父は一夜で「革命」の対象となりました。妻が日本人であったことも迫害の理由になったようです。学校の黒板に父の名を書かれたその日から、私はいじめの対象になり……。文化大革命の終結によって父の問題はやっと解決しました。私は師範学院を卒業し、小学校の教員になりました。当時中国では、教員は人に尊敬される職業ではなく、給料はよくないし志望者も少なかったので、私のような生い立ちのものでもなれたのです。でも教員生活を始めるにつれて、いろいろな悩みが生じてきました。「日本人の先生」とか「日本の娘」とか様々なことを言われるのです……。

中国で生まれ育ち日本語さえ話せないのに、どうして「日本人」といわれるのか不思議でしかたありませんでした。ちょうどその頃、中国残留日本人の帰国ブームが起こり、日本で日本人として生きようと決意した私は、母を説得して永住帰国しました。帰国後、思わぬ問題が次々と起こってきました。まず言葉の問題。そして今度は「中国人」「中国の娘さん」と言われるのです。

何のために日本へ来たのか自分でもわからなくなり、精神的な支えがどんどん崩されて行くなかで、ある日本の方から「あなたは日本と中国の両国の生活経験の持ち主で、これからはこの経験は貴重になるのです。色々なことに興味を持ち、経験を積み重ね、多くの国の方と接して感性豊かな国際人になれば一番良いと思います。」と言われました。その夜は眠れませんでした。そうですね、「中国人」だとか「日本人」だとか人に認めてもらうよりも、まず自分自身が「何を求めるか」なのです。その方のひとことで、わたしは精神的に苦しい境地から抜け出すことができ、また人とのコミュニケーションによって、自分自身の本当の気持ちを確認することができました。

永住のために来日しましたが、当初日本語はまったくできず、今思えば本当に冒険的行為でした。教科書もなく、周囲に日本語学校もない環境の中での勉強は苦労しました。毎日ノートと筆記用具を持って、職場や商店で、人と出会うたび、皆さんに教えを請いました。わからないところは辞書でしらべ、辞書にのっていなければ中国語ができる日本の方にお願いして教えてもらい、皆さんの助けによって日本語の独学ができたのです。在日年数のわりに進歩がないと、周りの人に批判されたこともありますが、厳しい言葉は励みにもなりました。このような繰り返しによって、日本語を覚えました。日本語の勉強からコミュニケーション、そして心と心でつきあうことで信頼関係も築くことができると思っています。